Research Journal
1987, 3, 41-49

随　筆

「ただし未見」訂正ひとつ

― 下島勲の句集『薇』―

町　田　　栄

A REVISED ARTICLE ON 'WHAT'S NOT REFERRED TO'

— ISAO SHIMOJIMA'S "ZENMAI," AN ANTHOLOGY OF HAIKU —

Sakae MACHIDA

Atomi Gakuen Women's University, Niiza-shi, Saitama 352

先年、「『井月の句集』をめぐって――下島・芥川・瀧井・室生・島村らの関心――」と題する一文を『跡見学園女子大学紀要』第十七・十八号（それぞれ昭59・3・15、昭60・3・15発行）に載せてもらった。

幕末安政のころに訪れて、明治の中ごろまで三十年間、南信州伊那峡の村々を寄食、寄宿して徘徊する乞食井月。その詠み捨て、書き捨てにした筆蹟、俳句、連句などが拾い集められて一冊にまとまる。すでに地もとでは伝説化し、東京では仄聞だにしない人物が、「田端人」たちによって回生したのだ。大正十年十月二十五日、「東京市外田端三四八番地楽天堂内　空谷山房」の刊行である。井月は歿後三十五年にして発掘、集成、顕彰の機会に恵まれたのである。

なお言えば、「こつじき・井月」ではない。「こじきせいげつ」とは奇異な呼称であるが、現に行なわれている。同様に、また「虱井月」ともいう。六・七年ほど前に『井月の句集』を探して、長野県下の古本屋や図書館をめぐり歩いていた時、「漂泊の俳人セイゲツ」は、ついに通用しなかった。その都度、怪訝な表情で見返えされた。――それが実態であり、親愛感を語って、昔から生き続けることばだったのである。

右の長たらしい標題の示す通り、乞食井月の句集をめぐって下島勲、芥川龍之介、瀧井孝作、室生犀星、および島村利正らの熱誠を洗い上げてみたいと思った。ほかに北原大輔、小穴隆一、石川淳、唐木順三などにも言及はしてみた。島村の存在が、異色に見えるかも知れない。実際、島村は『井月の句集』にも、『井月全集』にも、その増補、復刻本にも、何ら関与していない。が、理由がある。

――島村利正の絶筆は、わずかに二分載で終った『火山峠』（昭56・1～5『文芸』）である。これも、例の「杉村理一」もので、歴史的な資料を調査、渉猟しながら自伝性を付与していく、氏一流の構想であろう。その代表作に『奈良飛鳥園』がある。創立者小川晴暢の生涯と、やがて飛鳥園を形成して行く群像とを、多くの挿話にからませて立体的、多角的に描き出す。少年時代に、島村は飛鳥園に入社していた。こちらは、井月滞留の地の出身（長野県上伊那郡高遠）という、結びつきがある。

しかも、作家登場の最初期からあたためて来た、宿願であったらしい。

長篇小説『火山峠』の構想がどのようなものか。構想ノートのたぐいは公表されていない。容積の計れぬ氷山の一角から推して、多弁を弄するのは慎まれる。

しかし、その主題は、生ま身の、決して風化されぬ実在の自由人、井月に心を寄せた四人の井月句集成、顕彰への情熱と推定できる。作中に、「芥川を中心とする田端の、当時の文化人交流の地熱のようなもの」という。四人ともに、生まれ故郷を離れて、新開地「田端」に肌身を寄せ合った人々である。彼らの「交流」は、芸術的な切磋にとどまらず、甘美な情緒すらこもる。胸裡に、父祖の地へのあこがれを潜めて、互いに共通している。

「地熱」は高められ、噴出しよう。それが空谷山房、下島勲の『井月の句集』編纂に結集すると推定してみた。島村自身の望郷、愛郷の「地熱」に通じる。が、うたい上げられずに、島村は逝った。『火山峠』の中絶は惜しまれるのだ。

如上の『火山峠』構想を軸にして、せめて、島村が博捜したであろう資料の一部なりと、その所在と解読とを明らかにしたいと意図した。

ところが、その第「五」章中に、下島勲の個人句集『薇』について、「ただし未見」と付記した。当時点で、字義の通りである。校正時に間に合わず、ようやく直後に属目した句集であるからだ。『薇』の全容は、下島の『随筆・富岡鐵齋其の他』（昭15・12・8刊興文社）に添載されている。それは読んだ。しかし、実物を手にしていないので、ありのまゝに記した。

従って、この文章の目的は該当部分を、次のようなことばにでも訂正しておけば、足りようか。

句集『薇』　昭一五・五・一五刊　興文社　私家版・非売限定二百部　序　野上豊一郎、跋「薇」のあと　室生犀星、後記　下島空谷子、絹布装帙付和綴じ　口絵二葉　全一六四句収録

いや、そんな容易なことではすむまい。島村が句集『薇』に接して、どのように評価するか、どのような構想を組むか、――に関わる。

せっかく紙幅を与えられたので、この機会に、もう少し下島の『薇』について述べてみたい。「二百部」出版の限定本、そのひとつを入手できた奇縁は篤いもの、とも思われるからである。

*

下島に、全六編著の刊行がある。すなわち私家版『井月の句集』、白帝書房版『井月全集』の編纂、随筆集『人犬墨』、『随筆・富岡鐵齋其の他』、『芥川龍之介の回想』の三著、および句集『薇』とである。いずれも堅牢、簡素、雅致に富む、いゝ本だ。とりわけて、手にして好もしく、品位の高いのが句集である。洗練され、いかにも瀟洒である。

たゞ、『井月の句集』を別して、他はすべて芥川歿後の刊行である。それを下島は惜しんでいたであろうか。言うまでもなく、芥川の早逝は恨みとする。痛恨きわまりない。が、自分の作物が芥川の目に触れることを、とくに、句作のそれを羞恥していたように、思われる。

おおよそ、下島の執筆活動は、昭和二年九月『文芸春秋』芥川龍之介追悼号に『芥川龍之介氏終焉の前後』（『人犬墨』収録時に『芥川龍之介終焉の前後』と改題）を、同じく『改造』芥川龍之介氏特輯に『芥川龍之介のこと』を掲載して、以降、盛んになる。請われて執筆したり、みずから書いて慰め、愉しんだりしているらしい。それらを随時、右の著作集に収録、刊行する。

処女作は、もちろん、芥川生前の『井月の句集』の編著であるだろう。だが、生来の俳句好きで、古い句稿を篋底に秘すものはなかったろうか。そうでなければ、句集の編纂なぞがなうまい。

何よりも、下島は楽天堂の開業医である。芥川家の主治医を勤めて、双方の親交は深まる。「田端人」たちとの交渉に広がる。その書齋の扁額「澄江堂」の揮毫で、能書家としても知られて行く。かねて文人画をよくする画才、鑑識眼の持ち主でもある。芥川に深く心酔して、交誼は作家芥川の全期を通じ、臨終をも見取った。

従って、芥川の方も交友記『田端人』（大14・3『中央公論』）の筆頭に掲げて、次のように語っている。下島の文筆、俳句に言及するところはない。

下島勲　下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と号し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違う年なれども、老来トルストイ

でも何でも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕の書畫を愛する心は先生に負ふ所少なからず。なお次手に吹聴すれば、先生は時時夢の中に化けものなどに追いかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の胆、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。

まだ、作句について「吹聴」するほどでなかった、というべきか。それとも、二人だけの密事なのか。

はたして、その翌年、翌々年に、下島が『驢馬』誌上に発表した計十六句には、鋭い晩年の目を配っている。内二つの秀句の出現には、大いに刮目したらしい。『驢馬』は、この雑誌表紙いっぱいに拡がる題字を、下島が染筆した縁がある。俳句の寄稿にも、室生犀星の慫慂が働いているかも知れない。

それは、句集の「後記」冒頭部に示される。「芥川龍之介君は、私の薇（ぜんまい）とほろ寒きの句を推賞し、殊に薇の句は、――これにまさる句は恐らく出来ないだらう、などと言つてゐた。」とうちあける。多分、余人をまじえぬ場で、秘密の対話であろう。たしかに、他聞をはばかることばだ。嘆息をもらすような、芥川流とはいうまい。実に、集中随一、畢生の傑作であろう。

薇（ぜんまい）の綿からぬけてあたたかき（注、初五ルビを除き、下五を「暖かき」に改めて入集）＝大15・5

土くれや雀の糞のほろ寒き＝昭2・3

唯一の句集に、あえて『薇』と命名したゆえんである。

芥川の「殊に薇の句は、――これにまさる句は恐らく出来ないだらう」とは、最大級の讃辞を捧げたものである。激賞された下島の喜びは想像にかたくない。「恐らく出来ないだろう」は、誰に、であろうか。下島個人に、とどまるまい。芥川自身も含まれよう。それから、囲繞する俳人たち小穴一游亭、瀧井折柴、小沢碧童、室賀春城、久保田万太郎、室生魚眠洞……にも。なるほど、それは密語でなければならぬ。

贈られたことばは、にわかに、遺されたことばに変って、ひびき続ける。下島には重荷になってもいよう。十数年の後に、

ついうかうか古稀を過ごしてしまひ、今更ら句集でもあるまいと思ひながらもまた取り出す古写真、厭やになるのに変りはないが、唯不思議なことには、以前と違つた別の態度から眺めることが出来るやうになつた。／それは、古いとか、リアルでないとか、まずいとか、或は非芸術などといふことから超越した所謂、怎うやら活きて来た自然や人の世に、よし浅くとも、たまたま触れて動いた情感の記録として、さうむざむざ捨て去るべきでもあるまいなどと、自分勝手な理窟から出なほして、

ようやく、句集出版に踏み切る。ここには、一つの蟬脱がある。覚悟もある。が、いかにも照れ臭さそうだ。この饒舌体、下島七十一歳にして、いまだ初心である。

もしかすると、下島の文筆家としての本領は、大量の随筆にあるよりも、俳句において発揮されたと、評価すべきかも知れない。句集『薇』の存在感は大きい。収める全一六四句は少なすぎる。精選に精選を重ねて、堪え残った佳句のみを集める。

意外にも、下島の作句歴は、ひそかに、非常に長かったのである。句集中に、はるか、日露戦従軍医時代の吟が五句採られている。「満州陣営」と題する、

外套や身のたけほしき一二寸

睾ぬかる馬いたいけな霰の日

などである。端正な古式を守って、「たまたま触れて動いた情感」を

盛っていよう。

その「後記」に、初めて「明治三十七年以来ざっと三十五六年間の、いとも貧しい句集」と、告白する。謙辞ではあるが、「三十五六年間」の句歴の長さに驚ろかされる。かつて、下島は多くの随筆中に、自身の句作を語ったことはないからだ。秘めて、潜流していたのである。それは隠匿というよりも、やはり、下島の含羞のなせるわざというべきだろう。周囲には若く、気鋭な、それもほとんど、河東碧梧桐門下の新傾向俳人たちである。彼らにまじって、この芭蕉、井月の旧套を墨守する老人は、緘黙していたに違いない。

一体私は俳句が好きなくせに、自分で作るといふことが億劫なたちで、随つてその句数も極めて尠ないばかりでなく、これを発表することが非常に嫌ひであつた。にも拘らず、一部の人から俳人でもあるかのやうに思はれてゐるのは、漂泊俳人井月などの紹介をした為であるらしい。

と、述懐している。

密事にも似た、幽かないとなみを窺いえた者は、ごく一部の友に限られよう。そのひとりに芥川がいる。そうでなければ、あの事々しい賞揚の仕方は解けまい。さらにひとり、室生犀星をも加えたいのだ。彼らとて、下島の「三十五六年」に及ぶ句歴に思い到らないだろう。

その前に、久保田万太郎の取った句を挙げる。「後記」にエピソードを語っている。「また久保田万太郎君は、桐の花の句を褒めて、―何処で作つたのか、といふから、田端の家の縁先へつれだして、屋根越しの桐の梢を指さし、始めて納得したといふ嘘のやうな話がある」と。

屋根越しの夕やけ雲や桐の花

室生犀星は、先に下島の最初の随筆集『人犬墨』の「跋」文を書いている。世に紹介の労をとったのである。その全文は、

空谷、下島勲氏は医の人、また能書を以つて聴え、畫技を以つてすれば触筆忽山紫水明の姿を抒ぶ。その医の術は柔かく又畫も柔かい。同時に医に鋭く書に濶達、畫も鋭いのである。その人物たるや典雅雄健、時に鋭く時に雄弁悃慨の情を述ぶるに似たり。／その随筆たるや敢て新奇を趁ふことなく又陳腐に堕ちること無し、悠々自適の文、高士俗腸にまみへざるの慨有、とり分け集中芥川臨焉記のごときは又他に求め得ざるところの好文献、一代の文士が臨終を物語るに当時の文壇往来手に取るごとく瞭然たり、これ稀覯の文なりといふべし。その他もろもろの長短随筆俳文の類、とりどりに面白からぬは無し、些知己を恭しくするがため跋を述ぶと云爾。

委曲をつくしている。なみなみならぬ敬意もはらっている。双方、長期にわたる、密接な交情がうかがわれよう。

例えば、下島日記の昭和二年一月元旦付には、次のような記録がある。

大喪中略式にて屠蘇雑煮を祝ひ謹みて新年を迎ふ。／午後室生犀星氏を訪ふ。高柳、宮木の両君あり。床には私の贈つた井月の「白梅や賤が軒場のこぼれ種」の軸をかけ、古瀬戸の壺に水仙が生けてある。私は――／井月の梅の句軸や御代の春／と口ずさんだ。／魚眠洞主人元旦の句／竹冴えて元旦となる庭明り／夕方まで話して帰る。

たがいに「新年」をよみ合って、隔意はない。下島の作句を披瀝して、気おくれのない親昵を証す。素顔をさらして顧みない。贈られた井月句を表装して、床の間にかけた座敷に招じ入れる犀星の心くばりも美しい。「御代の春」の句は入集されている。

なお、「高柳」は高柳真三、中野重治を伴って初めて犀星に紹介した人、のちに東北大学教授、法学博士、室生家内で親しく、「真ちゃん」と呼ばれていたという。「宮木」は宮木喜久雄、『驢馬』同人、編集にたずさわって詩、評論、小説を誌上に発表している。

――下島は室生家の主治医であり、往来診の記録が見える。日記は、昭和二年四月一日から三十日までの部分のみ、『古い日記から』と題して、昭和五年五月一日付発行『春泥』第三号に発表している。随筆集『人犬墨』には、同題のもとに、昭和二年一月一日から五月三十一日までを集録する。時期的に、『芥川龍之介終焉の前後』に連らなる。最晩年の芥川を中心に、「田端人」交渉を示す一資料となろう。

室生は、句集『薇』にも跋文「『薇』のあと」を寄せている。そこでは、次の六句を取っている。

小流れに濁る日のあり沈丁花
薇の綿からぬけて暖かき
パラソルをそとすぼめたる桜かな
苗賣の来て糠雨となりにけり
皀角の西日まばゆくからびけり
掃溜の中に花もつ南瓜かな

集中、代表句を掲示して懇切、丁寧である。憂愁、枯淡、艶治、無聊、華麗、属目など多彩、多様な作柄と、おのずから、長い「三十五六年間」おりおりの詠吟とを明らかにして、挙げている。「薇」の句は芥川と共通するが、特筆するのは次の二句である。いや、「皀角」の一句か。

「皀角」の句はさんらんたる美しい句である。かういふ磧とか山路とかにある一光景をつかまへ得たことは、集中の句の抜手を切つたものであり私のひそかに驚くところ、ここにはいり込んで平然と事もなく一句をなしえたことは空谷先生さへご存じあるまい。そして人の心の深さはその人の知らぬ間に形をあたへるらしく思はれる。「苗賣」の句の温かい悒陶しさも日増に濃くなりゆく春の日が思はれる。

何んと、行きとどいてやさしい鑑賞であろうか。「皀角」の句をたたえてやまぬ。無意識の句境に参入しえた、とまで賛美する。「薇」の句とは双璧で、しかも、対照的な味わいがあろう。季は春秋に分かれ、優情・暖色と非情・絢爛ともいえる。室生は、芥川の取った「薇」を知り、それを念頭に置いて「皀角」の句を挙げているかも知れない。「さんらん」は燦爛の意であろう。――下島は、それを句集標題に採用しない。歿後はるかに、芥川を追慕しているのである。

いずれにせよ、野趣に満ちて、決して都会化されぬところで、自然に下島の本質が働く。それを芥川、室生が見抜いているのだ。

ところで室生の洞察、創見に富んだ指摘は「跋」文の前半部にある。

「薇（ぜんまい）」一巻を読んでところどころに絹綿のやうに光る、美しい句にゆき逢ふことが愉しかつた。この愉しさは空谷先生の一等あどけない心がそなはつてゐるからで、こころからの本物のやうな気がする。畫の話がでると空谷先生は毎時も赤くなつて気焔恐るべきものがあつたが、私は不尠敬遠してゐた。だが、発句のことになると小さくなつてこの人にかういふつつましさがあるかと思ふくらゐ慊遜であつた。空谷先生のうちで一等美しいものを先生は一等あと廻しにされ、羞かしがられてゐたのである。

要約は、末文の一語一語のうちにこめられている。こと、自作の俳句に関しては口を閉ざして、下島は小心の人、慎重な人、含羞の人で

あり通した。室生は、下島の真骨頂を作句に認めて、「一等あどけない心」、「こころからの本物」、「一等美しいもの」という。そして、「一等あと廻し」に残して、はにかみをたたえている、と説く。さすがに、積年の慧眼である。

これは客観的な評言を超えている。心の琴線に触れた句集というとき、逆に、室生自身の内心も照らし出す。東京生活で領略も、侵害もされぬ無垢なるもの、なつかしいものを求めて、出会ったよろこびであろう。句集に、離郷者の心の発露を見出しているのである。

巻頭を飾る野上豊一郎の「序」に、「我鬼君幽界に去つて先生の寂寞殊に甚しく、傍の見る目も痛痛しきばかりなりしが、今や先生西郊に隠れて乃ち余が寂寞また尠少ならず」という。彼我に通じる「苦衷」を慰めるにふさわしい句集、と述べる。「巻中しばしば知友の影像の描き出さるる者ありて、興趣の更に竭くるを知らず」と。これまた、下島の心中をさとる、友のことばであろう。

*

『薇』一巻は、このような句集である。

下島勲編『井月の句集』をめぐって、芥川ら群像を物語ろうとする『火山峠』の作者にとって、好「資料」たることは疑いをいれまい。島村は、この句集を献辞はないが、亡き芥川にディディケートしたものと解するであろう。芥川をよんだ八句、うちの六句は歿後の吟である。追慕の姿勢はかたい。生前をよんだ句は、

澄江堂にて　芥川君の熱き炬燵を好みしは有名なり

元旦のいよいよ熱き置き炬燵

ある日の芥川龍之介

なで肩の瘠せも縞紹の羽織かな

ほかに犀星、堀辰雄、小杉放庵、春城、小穴、菊池寛、久保田など、「知友の影像」を活写した句は多い。『火山峠』の二回掲載部に見るように、挿話集成的な、この長篇構想に不可欠な話柄を提供する句集だ。

島村も、下島生来の俳句好き、俳句よみに、文人趣味の核心を発見したであろう。本領なればこその恥羞であったのだ。それを養った源泉を尋ねたに違いない。いうまでもなく、乞食井月が俳句を蒔種し、はぐくんだ伊那峡の出身者であるからだ。ふるさと人は、放浪者の後半生を託すに足る、情誼をもって対した。無為徒食をほしいままに許した。瀕死の泥酔者を見取り、弔い葬る。その血脈は下島に流れている。実際に、井月その人の風貌を少年の日の記憶にとどめる、「田端人」中のただ一人である。同郷の島村も、隔世のその後継者である。

『火山峠』構想中に、句集『薇』の占める位置は――。容易に想定できる。おそらく、長篇小説の最終章、『井月の句集』刊行を語ったあとに、いわば、その後話に組みこまれるだろう。しかし、余話ではない。

早くも、翌大正十一年四月には編集、出版の実務を担当した瀧井折柴が「田端」を去って、ふたたび戻らない。次いで、後に白帝書房本刊行に尽力する犀星も、いったん立ち去る。

田端　魚眠洞の移転近し

若竹の石なき庭となりにけり

昭和二年七月二十四日、芥川の自殺。

芥川龍之介逝く

枕べのバイブルかなし梅雨くもり

永久に眠れる龍之介を写す小穴隆一

顔をてらす晝の燈しや梅雨くもり

芥川龍之介惜別の菊池寛

白百合にまたさめざめとうなだるる

同二十七日に、谷中斉場で葬儀が行なわれ、菊池は、友人代表として霊前に弔辞を捧げている。

歿後、昭和五年五月七日に下島は文子未亡人と同行して、

鵠沼　芥川君の旧居を訪ね

とざされしままの二階や松の花

また同年、祥月命日に墓参して、

芥川龍之介四回忌　染井墓地にて

蜘蛛の糸眼鏡にからむ暑さかな

正しくは、芥川の墓は染井墓地の奥、突き当りの慈眼寺の境内にある。今、かなめもちの生け垣に囲まれた、小さな墓所である。真四角の御影石の正面に「芥川龍之介墓」の文字、頭部には五七の桐の家紋がともに浮き彫に出ている。かたわらに、「芥川家先祖代々之墓」がならび建つ。

少し前、昭和五年二月に瀧井は我孫子、京都、奈良を転居して八王子に住んで、もう動かない。

金沢、田端、軽井沢など各地を転々した犀星も、大森区馬込町東三―七六三に家を新築して落ち着く。昭和七年四月以降、終生の住居である。作庭に凝って、自称を『庭を造る人』（随筆集、昭二・六・一八刊　改造社）という。

馬込　犀星居の庭

実柘榴や首かたむくる石佛

最も古く、明治四十年来田端に住み、「田端人」たちの集散、去就を見とどけ、ひとり「寂寞」の感をつのらせている下島も、身を処す時を迎える。昭和十二年の「秋とりあへず吉祥寺に仮り越しをし、押しつまつた年末に、（中略）中央線武蔵境駅から北へ真直に五六町、櫻橋の付近に居を定」（『花萱草』）めて転居する。野上のいう「西郊」、東京市外武蔵野町関前一一九六に「隠れ」去ったのである。

三十年以上住みなれし田端より

秋風の吹くがまにまに居を移す

そして、翌々昭和十四年七月二十四日に、遠路、久しぶりに芥川家を訪れる。

芥川君の十三回忌

紫陽花の雨むしあつき佛間かな

この格別な一日は、小品文『河童忌』に物語っている。誌上には未発表らしいが、『随筆・富岡鐵齋其の他』に初収録される。

まず、田端の北原大輔宅を訪ねて歓談する。朝からの「雨は上つたが曇天のいやがうへに蒸し暑い」。芥川家の仏間で未亡人と話していると、小島政二郎夫妻、佐佐木茂索夫妻、「香瀧さん」（上瀧鬼(注)か？）が来合わせる。午後六時から自笑軒で開かれた、河童忌にも出席する。谷口喜作、久米正雄、小沢碧童、永見徳太郎、宇野浩二、さながら全文が旧知再会、故人ゆかりの人々交歓の記を呈している。懐旧の情は濃い。

十三回忌の田端行は、ひそかに別れを告げているのである。

以降、下島は芥川について語らない。固辞したにもかかわらず、慫慂されて『芥川龍之介の回想』を刊行する。芥川関係の文章をまとめたものである。巻頭に『芥川龍之介終焉の前後』を、掉尾に、この『河童忌』を据えている。なお、この最後の随筆集にも、『俳人井月』の

再録を忘れない。

「紫陽花」の句は、句集中、最近作のひとつであろう。『河童忌』には「（昭和・一四・七）」と付記がある。翌年五月に『薇』は刊行される。

やはり、――『薇』は「田端人」終焉記として、『火山峠』構想に編入されるべき句集である。

（注）「こうたき・たかし」は芥川龍之介の旧友。『学校友だち――わが交友録――』（大14・2『中央公論』）に寸描されている。